

熊本市徳富記念園だより
第6号熊本市後藤是山記念館だより『淡成居』

合同企画展特集号

令和7年 令和8年
11月1日～3月31日

合同企画展

是山と蘇峰

『書簡に見る二人の交流』

会場

徳富記念園

熊本市中央区大江4丁目10-33

後藤是山記念館

熊本市中央区水前寺2丁目6-10

・開館日時：9:30～16:30、月曜休館（月曜祝日の場合、翌火曜日休館）
・入館料：大人200円 こども100円
（市内65歳の方、市内小中学生は無料）

〈合同企画展・解説〉

是山と蘇峰

書簡に見る二人の交流

後藤是山は明治44年（1911年）、九州日日新聞社から徳富蘇峰の国民新聞社へ記者留学をします。是山はこの時初めて蘇峰に出会います。蘇峰はその是山の仕事をし、蘇峰はすぐに文芸面での才能を見抜きました。

親子ほど年の違う二人ですが、是山の記者留学を機に二人は生涯を通し交流を深め、多くの書簡を残しています。

今展では二人にまつわる様々な書簡に触れながら、二人の交流の様子を垣間見たいと思います。

大正11年

① 23年ぶりの蘇峰の帰郷と「大

観峰」命名（徳富記念館で展示）

徳富蘇峰が、阿蘇の「遠見ヶ鼻」に登り「大観峰」と命名したのは大正11年5月18日ですが、実はこの時熊本への帰郷は23年ぶりのものでした。この時の帰郷は

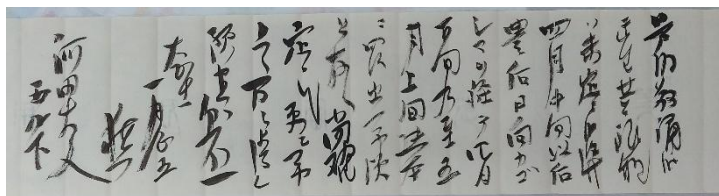
蘇峰にとってよほど懐かしうれしいものであったらしく、いち早く同年1月25日付で大江義塾跡の旧居を守る姉光子の夫である河田精一氏へ書簡を送り、「4月中旬以後、豊後、日向、鹿児島を、4月下旬乃至5月上旬熊本に罷り出る」と知らせています。

4月22日に東京を出発し、20日後の5月11日に熊本入りとなりましたが、鹿児島から水俣、八代、人吉と向かい、八代経由で熊本へと入って来た時、「雁回山を見て、緑川を渡り、金峰山を雲煙の合間に眺めた時は何となく涙が湧き出づる心地がした」と『烟霞勝遊記』で回想しています。

そして熊本駅に着くとそのまま泰勝寺の細川侯の廟、立田山山腹の恩師の墓や熊本諸名家の墓所に参り、大江の親戚の墓地などを回りました。そして翌日の12日、大江義塾の跡である大江の河田精一

宅を訪ねました。

そしていよいよ阿蘇に向かったのは5月17日でした。



蘇峰から大正11年1月25日付で河田精一氏へ送られた書簡

この日は、午前6時に熊本駅を出発し立野で降り、自動車に乗り換え戸下、栃木温泉を経由して垂玉温泉まで行き、そのまま阿蘇山（中岳）に登っています。背後に南郷谷を見下ろし、阿蘇谷の方へ下るルートです。蘇峰は南郷谷の雄大な風景を見て、「この展望の妙は、（略）屏の如く立て回す外輪山を見るのだ」と感動を伝え、「屏列連峰作外輪」という七言

詩を詠んでいます。そしてその日は火口まで登り、阿蘇谷へ下り、内牧の塘下温泉に泊まりました。

いよいよ翌18日、蘇峰は阿蘇谷を大観できる「遠見ヶ鼻」に登ります。その時、同行した熊本師範学校教諭の角田政治（すみだまさじ）ほか2、3名が、遠見ヶ鼻に名前を付けてほしいと迫ります。その時蘇峰は、すでに立派な名前があるからと断ります。しかしどうしても聞き入れられず、やむを得ず『大観峰』では如何であろうか」と言うと、一同拍手が起り大賛成となつて、その名が決まったと言います。

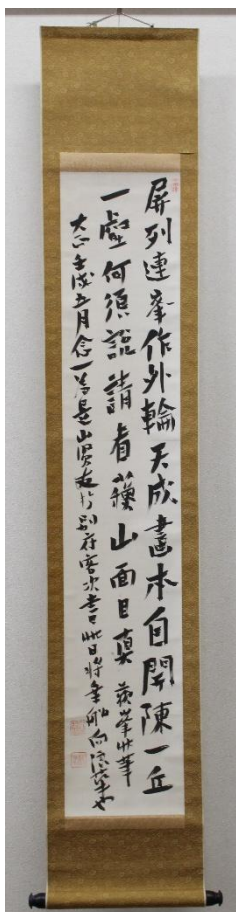
蘇峰らは翌19日、阿蘇を離れ大分へと向かいました。

昭和2年

② 是山の『かはがらし』創刊

（是山記念館で展示）

是山は昭和2年4月、41歳



掛軸「屏列連峰作外輪」徳富蘇峰筆（大正11年）

の時に末次青雉（せいち）らと共に俳誌『かはがらし』を創刊します。『かはがらし』は、昭和19年に『東火』と改称され、是山95歳まで、533号が発行されました。是山は『かはがらし』の創刊に際し、昭和2年4月12日付で蘇峰に創刊報告の書簡を送り、その意気込みを次のように語っています。

「（中略）『かはがらし』は水前寺名産にて、到底天下の「かはがらし」にては御座無き候。されど是れ俳壇の浪人者にして、またあえて専門の俳人たることを期せず、素人俳句、文人俳句の作者を以て満足しおる田舎児一団の拠城にこれあり。少なくとも1、2年の籠城は大丈夫と自身仕りおり候」

この手紙の中で語られている創刊の精神は、以後終刊するまで貫かれました。

それに対し蘇峰は送られてきた創刊号に対するお礼を秘書並木浅峰（仙太郎）氏を通し、「御創刊の俳誌雑誌『かはがらし』を蘇峰先生へ御恵示下され、先生に於いても衷心より健全の発達を期待せられおり候。」と書き送っています。

また、蘇峰自身からは第2号に掲載された俳人末次青雉の「鯉魚を見るの記」などを読んで「緑川尻の鯉魚が面白く候。もし機会があれば相試み申したく候」などと、親しみ深い感想を述べた書簡を送っています。

「かはがらし」というのは、和名でオランダガラシ、英名でウォータークレス、仏名でクレッソンと呼ばれますが、是山は創刊号で「かはがらし」について解説しています。それには「水前寺の池尻から江津湖の湖口にかけて最も多い植物で、（中略）『三才図会』などに載せられている湿草類の「葶藶（ていれき）」のことで（中略）水



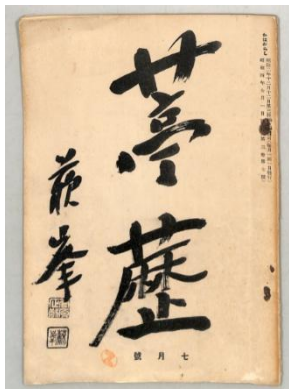
「かはがらし」第2号を読んだという蘇峰の手紙（昭和2年）

前寺の清浅の水に生じて、3、4月の頃雪白の小さい十字花をつける」とあります。

『かはがらし』第3巻第7号（昭和4年7月1日発行）には、是山が蘇峰と雲仙登山をした時、蘇峰が「かはがらし」のことを知っていて「あなた達のやって居る『かはがらし』はウォーター、クレスといって綺麗な水にできる



本多敏夫作「かはがらし」の絵
（『かはがらし』第13巻第9号より）



蘇峰の揮毫した「葶藶」（昭和4年）
（『かはがらし』第3巻第7号より）

植物ですね、あれは富士の湖水などにもあるが、食べると一寸ぴりつとして茎もうまいものですね」と語ったことが書かれています。この号からは蘇峰の揮毫した漢字の「葶藶」が使われるようになりました。

昭和2年 ③「淡成居」命名

（是山記念館で展示）

是山は昭和2年の夏、現在記念館のある水前寺に引っ越して来ます。是山はここを、「熊本城の東郊一里、天授の古戦場の一端にある、馬蹄形の小高い3反あまりの栗畑で、文字通り草分けの一軒家であり、一木一石ない」家だつたと語っています。

そんな新居に是山は名前を付けようと蘇峰に相談しました。蘇峰は昭和2年7月9日付の書簡で次のように返答してきます。

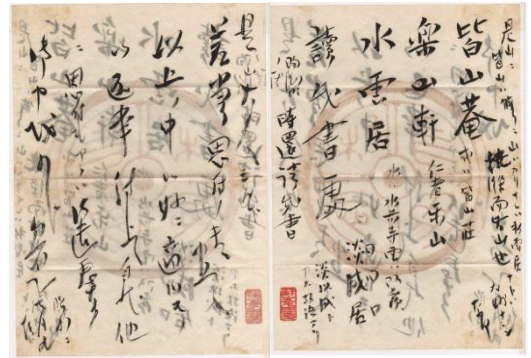
「皆山菴、楽山軒、水雲居、讀我書處、淡成居など、他に思いついたらご遠慮なく」。

これに対し、是山は同年7月16日付の書簡で蘇峰に返事を書きます。

それには、山莊の御命名は、「淡



蘇峰が揮毫し送ってきた「淡成居」扁額。(昭和2年8月)



「淡成居」命名の時の蘇峰からの書簡
(昭和2年7月9日付)

成居」と「讀我書處」のふたつからお願したい。揮毫はどちらか一方を大きく、一方を小さく定めてほしい、と頼みました。そして是山は、さらに水前寺の西にあるので「水西荘」と、頼山陽

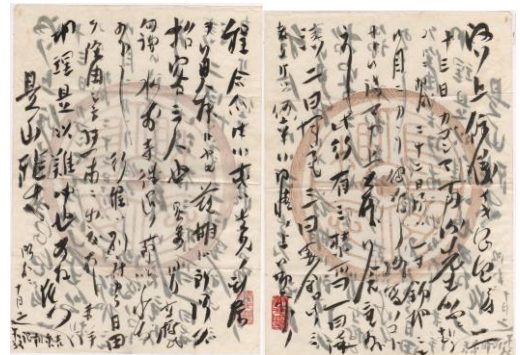
の居宅名から無断借用してもいいのではないかと思うがどうだろうか、とも尋ねています。また「水雲居」とも考えてみたが、雲を阿蘇よりも雲仙に見る人が多いのではないだろうか、とも述べ、是山も家の命名には相当悩んだことが伺えます。

そして蘇峰が是山の書簡を受けとり、同年8月に入り山王草堂から「淡成居」と「讀我書處」と揮毫した二つの額が送られてきました。是山はこれで家の名前を『淡成居』と命名しました。

昭和2年

④蘇峰夫妻の「淡成居」訪問 (是山記念館で展示)

蘇峰は昭和2年10月23日、新居の「淡成居」を訪れます。この時、蘇峰65歳。前年には『西郷南洲先生』を出版し、昭和2年10月24日に開催された鹿児島での南洲先生50年祭に参加するためでした。是山は10月22日、日田で蘇峰夫婦と合流し、咸宜園(かんぎえん)を開いた儒学者・廣瀬淡窓(ひろせたんそう)の墓参を共にした後、熊本へ向かいました。この年は蘇峰にとっても大



蘇峰の是山へ帰郷を知らせる書簡
(昭和2年10月2日付)

変つらい年で9月18日に弟、蘆花を亡くしています。

同年10月2日付の蘇峰の書簡では、「淡成居」を訪問したい。行程は別府から日田を経由して熊本へ行くことが書かれています。「淡成居」へは蘇峰は夫婦で訪れ、蘇峰は静子夫人から何度も帰りを促されるほど楽しく過ごし、話も弾みます。この時の様子が、帰る間際に蘇峰が揮毫した『淡成帖』に残されていました。

昭和二稔十月念三、訪淡成居室、新築庭将成、金峰翠色蘇嶽白煙、浮動千秋光清空之間、主人与客閑座品書論文、不知時刻之移、殆将忘却来時道、同人数輩相促

乃割遅々而去
蘇峰陳人 時年六十又五

(大意)

昭和2年10月23日、淡成居を訪れた。新築の家と庭があった。金峰山の緑は美しく、阿蘇は白煙を上げ、秋の清空の中をたなびいている。主人と書を品し、文を論ずる。熱中しすぎて時が過ぎるのも忘れ、妻が何度も帰るのを促すくらいすっかり遅くなり、やっと帰ることになった。

蘇峰陳人 65歳

蘇峰が訪れたこの日は秋晴れの焼け付く暑さで、庭での記念撮影の時など額の汗を拭くほどでした。蘇峰は一木一石もない淡成居の庭を心配して、「東京に帰ったら山王草堂(蘇峰の邸。現在の東京都大田区)から少々苗木を送ってあげよう」と言って、贈られて来た一本が今、庭園に聳え立つ公孫樹(いちよう)の木です。この公孫樹の樹齢はその時から数え100年ということになりました。

昭和4年

⑤蘇峰が国民新聞社を退社 (是山記念館・徳富記念館で展示)

蘇峰の国民新聞社は、大正12年9月1日に起こった関東大震災で



「今更女々敷事も不申上候得共五十年来新聞記者タル面目ト意氣ト二對シ不得已決心仕候」などと退社への思いの書かれた蘇峰の書簡（昭和4年1月12日付）

全焼し、印刷機など一切を失います。そのため国民新聞社は経営存続の危機に見舞われますが、雑誌『主婦之友』の社長であった石川武美（いしかわたけよし）の支援を受け一時立ち直ります。しかし石川社長の支援が終わったことや国民新聞社で活躍していた蘇峰の次男萬熊の急逝もあり、やむなく実業家・根津嘉一郎に資本参加を求めます。しかしこの資本受入れは蘇峰側との意見の相違から、新聞社内でも蘇峰の言論も縛られるようになってしまいます。昭和4年（1929年）、ついに蘇峰は国民新聞社退社の決心をしました。

蘇峰は昭和4年1月5日に、是

山にも最後の国民新聞社での一文、「国民新聞愛読者諸君各位、不肖は国民新聞社社長及び記者を辞退したることを、諸君に向かって、告白せざる可らざるを悲しむ」を送っています。

是山からは1月10日、すぐに書簡を送り、「今朝の新聞にて先生が近く国民新聞社御引退の決意これある由東京電話に接し実に一驚を喫し申し候。先生が自ら撒き自ら培い自ら育て上げられたる国民新聞社にて・・・近年御執筆の上になで多少の御気がねありしことはかねて心外千万と存じおり候ところ・・・先生の血と汗との結晶たる国民新聞をついに先生自らが引退されることは意外も意外、全く理においても情においても信じ能わざるところにこれあり候」と悔しさをにじませながら詰まる思いを吐露しています。

蘇峰も同月12日の書簡で、国民新聞社退社の件について、「今更



蘇峰の揮毫した「文章報国」（昭和4年3月10日、蘇峰67歳）

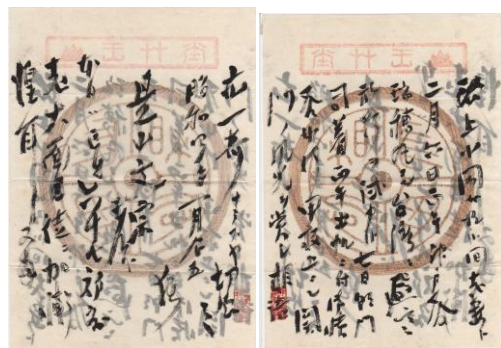
女々しきことも言わないが、50年来の新聞記者たる面目と意氣とに対し已むを得ず決心したこと。読者や知友諸君に対しすまない。残りの人生は『文章報国』にささげること」などと書かれた手紙を是山に送っています。

昭和4年

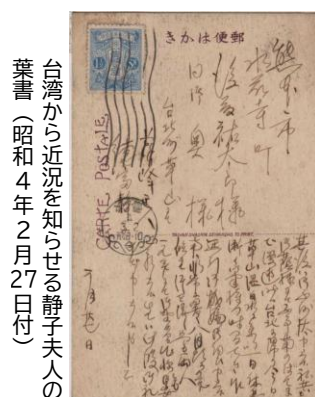
⑥蘇峰退社後の台湾旅行とその後の九州訪問

（是山記念館・徳富記念園で展示）

蘇峰は国民新聞社退社後、2月6日に静子夫人と神戸から瑞穂丸で台湾へ避寒旅行に出掛けることにし、そのことを昭和4年1月25日付では山へ手紙で知らせ、「7日の朝、門司港に着き、



蘇峰が夫妻で台湾へ避寒旅行に出かけることを知らせる書簡（部分）（昭和4年1月25日付）



台湾から近況を知らせる静子夫人の葉書（昭和4年2月27日付）

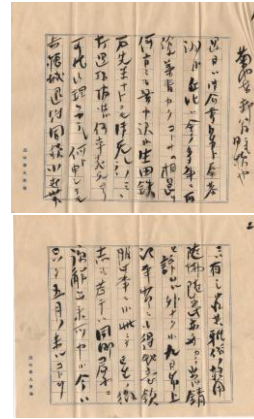
正午出帆の予定で甲板の上で関門の風光をめ度うと思っている」と言います。是山は蘇峰の国民新聞社退社の気持ちをよくよく慮ったのでしよう。門司港へ見送りに行っています。

後日船中から静子夫人からは山へ見送りのお礼の葉書が出され、2月27日には旅行中の様子を伝える葉書が届きます。

これを見ると「台湾を漫遊しており、今日は台北の北にある草山温泉で一日休息した。こちらは常に暑く8月ごろの気候で二人とも元気にしている」などと書かれています。

そして是山は台湾旅行の帰りに寄港した別府まで再び出迎えに行きました。昭和4年3月28日には秘書並木仙太郎の代筆で出迎えに対するお礼状が出され、その翌日には蘇峰の直筆で、「国民新聞

社の残務処理が忙しいこと。5月の九州訪問が待ち遠しい」などと書かれた手紙が届き、是山と蘇峰の親交の深さを垣間見ることができます。



蘇峰が、残務処理が忙しいなど送った書簡(部分) (昭和4年3月29日付)

九州訪問の中でも熊本への帰郷は蘇峰にとっても楽しみなものでした。是山も熱心に蘇峰の帰郷を待ち受ける準備を進めます。

蘇峰帰郷の間近になった5月13日、是山は帰郷中の日程を入れ都合を尋ねる手紙を送ります。その手紙には、「久住高原探勝」と

「熊本での茶会」が入れられていました。久住高原は是山の郷里への案内であり、茶会は肥後古流の古市流宗匠である武田智得の発起による茶会となっています。

蘇峰はその時は是山からの手紙がまだ届かなかったでしょう。

5月16日付で蘇峰は手紙を是山に出しています。「5月20日



空白の日程箇所に予定を入れるようは山に依頼した書簡(部分) (昭和4年5月16日付)

から熊本に来る予定で、すべての日程が埋まっているわけでもない。だから空白の日時を埋める手伝いを

い」との依頼でした。この手紙は全体で150センチほどあり、その中で「何月何日の予定」として埋まったところはそれが書かれ、そうでないところは空白になっている面白い手紙でした。蘇峰はこの空白に温泉岳(雲仙岳)行、玉名行、久住行を加えてほしいなどと書き、今回の希望としては「演説とか揮毫とかは食傷。御推察ください」などと書いています。

これは余談ですが、蘇峰が久住を尋ねたときはあいにくの雨でしたが、それでも自動車で高原を駆け巡り、高原の美しさを堪能しました。それでも是山は昭和4年7月4日付での蘇峰宛ての手紙には「ただ残念なりしは久住高原の風雨に候。これは是非再遊を仰ぎ、山中の温泉にご一泊の上(中

略)、我が故山の風光が先生の靈筆により紹介されるればこれに過ぎたるの喜び御座無き候」と書き送っています。ちなみに昭和7年、与謝野寛、晶子夫妻を是山が案内し久住を訪れますが、実はこれが実現したのも蘇峰からの与謝野夫妻への勧めがあったからだったといえます。

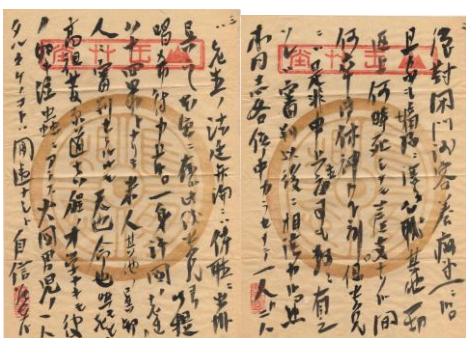
昭和21年

⑦蘇峰が戦争犯罪者として逮捕された時の書簡

(是山記念館・徳富記念園で展示)

蘇峰は、終戦の昭和20年8月15日、山中湖畔にある別邸双宜荘(そうぎそう)で終戦を迎えました。83歳の時です。蘇峰は終戦直後から自ら戦争犯罪者として逮捕され、戦争裁判にかけられると考えていました。

『伝記徳富蘇峰』(早川喜代次著)にもその時の状況が詳しく書かれており、同年9月27日に出した緒方竹虎(東久邇宮へひがしくにのみや)内閣の書記官)への書簡で「私(蘇峰)は8月15日以来、戦争犯罪者とされることは覚悟しており、むしろその日が待ちどおしいほどだ」と語っています。



蘇峰が自分の法廷弁論の時には熊本から1、2人は傍聴に来てもらえないか、と是山に依頼した書簡(部分) (昭和21年2月24日付)

果たして蘇峰は、昭和21年1月2日、前年の11月から移った熱海の晩晴草堂で逮捕されます。しかし高齢であることと、ひどい三叉神経痛であることが考慮され、自宅拘禁となります。蘇峰は戦争裁判では米国側に正々堂々と自分の考えを述べるつもりでいましたが、心配なのは自分が高齢であることと病体で悩まされていることでした。

同年2月24日の蘇峰の是山への手紙には大略、次のようなことが書かれています。

「自分も病気で臥しており、法廷での所信開陳がおぼつかなくなるのではないかと心配であるが、今は養生第一にしている。・・・貴兄

にお願いがあるが、自分の法廷弁論の時に熊本の同志各位の中からせめて1名か2名、傍聴に来てもらえないだろうか。そのことを貴兄より同志に相談してほしい。」

これに対し、是山は同年3月25日付で「熊本で裁判傍聴について相談した。出来るだけ自分が上京し裁判の傍聴をしたい。」と返事を出しています。

しかし、その後蘇峰は開廷中のいわゆる「東京裁判」での出廷は老齢病身のため免ぜられ、法廷に「宣誓供述書」を提出し却下されるなどしますが、昭和22年9月9日、戦犯容疑と自宅拘禁が解かれることとなりました。

昭和31～32年

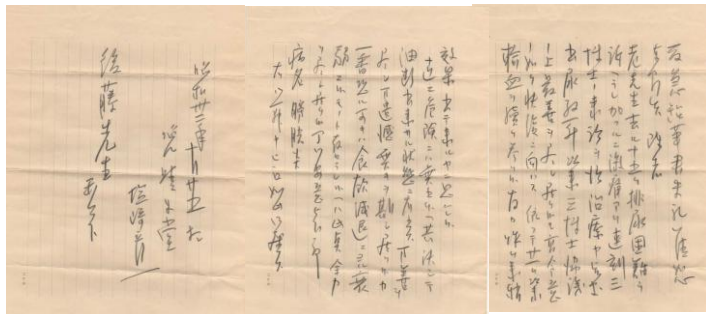
⑧蘇峰の死を迎えて

(徳富記念園で展示)

蘇峰は、昭和32年(1957年)11月2日、熱海の晩晴草堂で亡くなります。是山は前年から、蘇峰の秘書塩崎彦市氏から随時蘇峰の病状を聴いていました。

昭和32年10月に是山は上京し、その折、粕谷の蘆花恒春園を訪ね、熱海の晩晴草堂にも蘇峰を見舞います。蘇峰を訪ねたのは

10月13日で、蘇峰は10月4日から風邪で静養中でしたが、その時には熱も取れ、一時間ほど病床で話をしました。そして帰る間際、是山の手を握って、「東火は益々発展して結構、どうか東火の諸君によりしく言うてください」と伝言があり、是山は安心して帰ります。ところが是山が20日に帰熊してすぐの25日、水俣蘇峰会から蘇峰重態の報が入り、水俣の淇水(きすい)文庫の館長中野晋氏がすぐに上京します。ちょうどその日、25日付で秘



蘇峰の秘書塩崎彦市からは山へ急ぎ蘇峰の病状を知らせる鉛筆で書かれた書簡 (昭和32年10月25日付)

書の塩崎彦市から鉛筆で書いた蘇峰の病状報告の手紙が届きます。それには、「蘇峰が10月15日から排尿困難を訴え、激痛がある。治療は最善を尽くしているが回復に向かわず、21日より輸血をしているのでその効果が出てくるのではないかと思う。万全は期しているが、怖いのは食欲減退による衰弱だ。とにかく全力を尽くしている。病名は膀胱炎」と心配する気持ち吐露しています。

しかし、蘇峰は回復の願い空しく11月2日午後9時33分に亡くなります。是山はその逝去を悼み、『東火』(昭和32年12月発行)で「95歳の高齢であった先生の長逝は、公的にも私的にも哀悼の至りである」と述べています。蘇峰は熊本市名誉市民でもあったため、11月8日、市主催で市民葬が執り行われました。その時は山は、『人間蘇峰』と題して講演(追悼談)を行っています。

そして昭和33年4月24日には、水俣の徳富家の墓地へ納骨されることとなった遺骨が熊本に着き、その日は熊本市主催で蘇峰告別式が熊日社ホールで行われ、翌25日に水俣市主催の埋骨式が行

われました。

大正13年・昭和37年

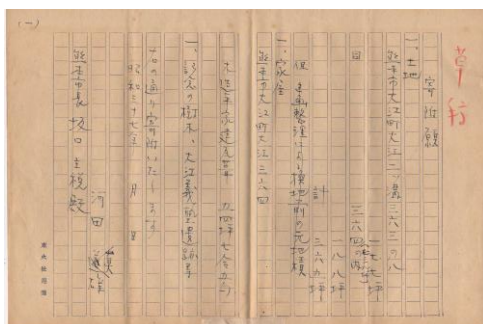
⑨徳富記念園創設に向けた

是山の貢献

(徳富記念園で展示)

徳富蘇峰と蘆花が青年期に過ごした徳富記念園は、大江義塾跡として県史跡に指定されています。この地は徳富兄弟の父淇水(きすい)が明治3年に藩命を受け出仕した際、元田永孚(もとだながざね・明治天皇の侍講)の仲介で購入し、水俣から移り住んだところ

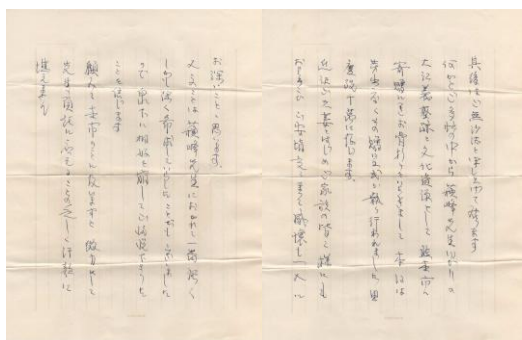
です。蘇峰はここにある旧居で明治15年から19年まで大江義塾を開くとともに、有名な著『将来之日本』をここで執筆しました。その後一家は明治19年に上京し、



徳富記念園創設に向け土地・家屋・記念の樹木・大江義塾遺蹟等の一切の寄付のため、是山が河田家から依頼され草稿した寄付願 (昭和37年)

以降は姉夫婦（河田精一、光子夫妻）が居住し、蘇峰は大正13年3月14日に河田家へ土地と家屋を譲渡しました。

河田家はそれ以降、土地、家屋とも所有、管理をしてきましたが、昭和37年9月20日に熊本市に寄贈され熊本市の管理となりました。是山はこの時も熊本市への寄贈に際し仲介役を果たしています。その時の様子は『カタルパの木陰で』（近沢恵美子編集）に書かれており、それには、最初は県が図書館にするから売ってほしいと言ってきた、それを蘇峰に話すと、蘇峰は「あそこに図書館ができるなら自分のうちの本を大分やるよ」と喜んだと言います。し



寄贈式当日、淇水文庫（水俣）館長中野晋から山へ寄贈の喜びを綴った書簡（部分）（昭和37年9月20日付）

かしそれは何らかの反対が出て実現せず、その後河田家は、熊本市に寄付して徳富記念館にしたい、と是山に相談したことが書かれています。是山はその意向を受けて、「寄付願」と「寄付の趣旨」「寄付物件の来歴」を草稿し、支援をしています。

寄贈式当日、蘇峰ともかわりの深い水俣市の淇水文庫の館長中野晋氏は寄贈の喜びを書簡にし、是山へ送っています。

この中で同氏はこの寄贈について、「このことは蘇峰先生におかれて一番強くしかも深く希求していたことでもありましたので、泉下に相好を崩してご満悦くださいましたことを信じます」と語っています。

今展では、徳富記念園と後藤是山記念館との合同企画展として、書簡のテーマに沿って両記念館での同時展示、徳富記念園、是山記念館でのそれぞれの展示に分け開催します。どうぞこの機会に両記念館に訪れていただき、二人の生涯に亘る交流と深い友情を感じ取っていただければ幸いです。

〈主な参考文献〉

煙霞勝遊記 徳富蘇峰著
蘇峰自伝 徳富蘇峰著
伝記徳富蘇峰 早川喜代次著
俳誌「かはがらし」
俳誌「東火」 他

徳富記念園

熊本市中央区大江4丁目10-33
TEL 096-362-0919



徳富記念園は、徳富蘇峰が明治15年（1882年）に父一敬と共に開いた民権私塾『大江義塾』跡です。当時、蘇峰のもとに延べ250名の青年たちが集まり、学びました。当記念園には蘇峰と弟蘆花に関する資料を展示した記念館も併設されており、5月には同志社の創始者新島襄から贈られたカタルパの花が咲きます。

後藤是山記念館

熊本市中央区水前寺2丁目6-10
TEL 096-382-4061



後藤是山記念館は、九州日日新聞の記者だった後藤是山に関する資料を展示した記念館です。後藤是山は大正、昭和と近代熊本文化の発展に寄与し、熊本県近代文化功労者、93歳で熊本市名誉市民となっています。当記念館では是山が昭和2年から99歳で亡くなるまで住んだ『淡成居』も公開しています。

○熊本市徳富記念園だより ○第6号熊本市後藤是山記念館だより『淡成居』

発行日：令和7年（2025年）11月1日 編集・発行・文責：熊本市後藤是山記念館 植木英貴

記念園・記念館開館時間：午前9時30分～午後4時30分 休館日：月曜日（祝日の場合は翌日）年末年始（12/29～1/3）

入館料 大人200円 小人100円（熊本市内の小中学生、65歳以上等は無料）